魏志倭人伝で陳寿が用いた「春秋の筆法」を解読して得られた８つの解
その１　「陳寿は里数表記を 10 倍にしていた」

細川　圭弘（よしひろ）

三つの比定問題

魏志倭人伝には大きく分けて三つの比定問題がある。

一、邪馬台国の比定地問題

二、卑弥呼のいた女王国の比定地問題

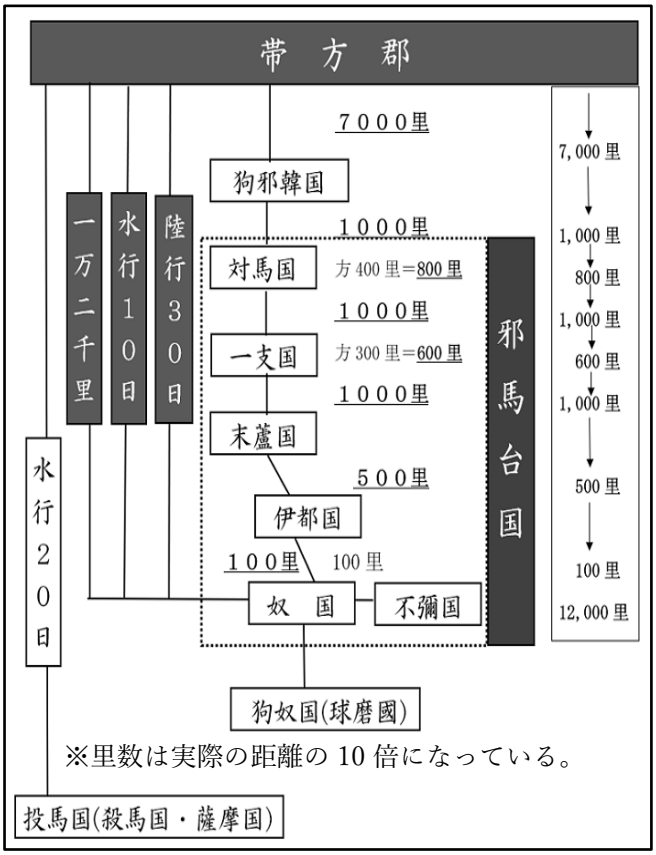
三、卑弥呼の墓の比定問題

この論争が未だに決着を見ない最大の要因は、マスメディアのミスリードなどの社会的問題を除き純粋に学問的な理由だけに絞れば、その最大の理由は、歴代の名だたる歴史研究家たちが、陳寿が所々に仕掛けた「春秋の筆法」という巧みな罠にことごとく嵌ってしまったことにある。

邪馬台国を比定するために必要な情報や解を導き出すための鍵はすべて陳寿の編纂した『三国志』の中に用意されているにも関わらず、なのである。

三つの比定問題を解読するためには、陳寿が魏志倭人伝の道程・里程記事の中に仕掛けた謎かけや罠、つまり「春秋の筆法」を見つけ出し、その背後に潜む真実を導き出さなければならない。そうして得られた解が、文献資料や考古学的実証との間で整合性を得ること、所謂全体最適であれば、邪馬台国の三つの比定問題論争に終止符を打つことができるはずである。それは自ずと、九州説と畿内説（その他の比定地説を含む）に決着をつけることにもなる。

最終的に得られた解の一例



この図は邪馬台国比定地問題を解くため、魏志倭人伝の中の帯方郡から邪馬台国までの道程・里程記事の中に秘められた「春秋の筆法」を解き明かし、その結果得られた解を整理したものである。

但し、里数表記は実際には 10 分の 1 にしなければならないのでご注意いただきたい。従来の説と大きく異なる部分は水行 10 日、陸行 30 日の解釈である。従来の解釈では、

水行 10 日＋陸行 30 日＝12,000 里

が定説になっていたが、「春秋の筆法」を解き明かした結果、起点が帯方郡となり、

水行 10 日 ＝ 陸行 30 日 ＝ 12,000 里

となった。そして、「春秋の筆法」を解き明かして行く中で、魏氏倭人伝の中の数字表記は、「100 の倍数表記はすべて 10 倍されている」ことが明らかになった。

数字表記が 10 倍されているのは次の 8 項目である。

一、距離の里数表記（邪馬台国は北部九州に収まることが判明した）

二、魏志倭人伝に登場する国々の戸数（人口）

三、邪馬台国(連合国家)の大きさ（卑弥呼の力が及ぶ範囲は北九州）

四、女王国の東千里餘（100 里余）

五、卑弥呼に仕える婢人の人数（千人ではなく 100 人程度）

六、卑弥呼の墓の大きさ（径 10 歩余り、約 13.85m～14.85m）

七、卑弥呼の墓の殉葬者の人数（百余人ではなく 10 人程度）

八、魏の明帝から卑弥呼に下賜された銅鏡の数（１00 枚ではなく 10 枚）

この 8 つの解がどのように得られたのかを、これから順を追って説明して行くのだが、紙面が限られているため、まず「一、」の距離の里数表記について解説したい。

魏志倭人伝が編纂された歴史的背景

まず、魏志倭人伝の編纂された歴史的背景や編者の陳寿について充分知っておく必要がある。魏志倭人伝、正式には『三国志』「魏書烏丸鮮卑東夷伝倭人条」は 280 年から 297 年頃に陳寿により編纂された。文字数にして 1,984 文字である。

編者の陳寿（233～297 年）は益州巴西郡安漢県（四川省南充市）に生まれた。字を承祚といい同じ巴西郡出身の譙周に師事し『尚書』春秋三伝（公羊伝・穀梁伝・左氏伝）を修め『史記』『漢書』にも精通していたといわれている。

魏・蜀・呉の三国がしのぎを削っていた 3 世紀の中頃、陳寿は蜀の文書事務に係る下級官吏で史書の編纂を職務としていたが、蜀が滅び、呉も魏によって平定されると、魏を禅譲した西晋に仕えるようになった。父の陳式は蜀の馬謖の参軍という地位にあったといわれている。「泣いて馬謖を切る」の馬謖である。馬謖は諸葛孔明の命に従わずに魏の張郃に大敗した責任を問われて死罪となったが、陳式もまた連座して責任を問われ髡刑（頭髪を剃る刑）に処せられている。その子の陳寿は西晋で孔明の文集「諸葛氏集（丞相諸葛亮集）」を編纂している。

『三国志』は魚豢の『魏略』、王沈の『魏書』、袁昭の『呉書』と、自ら編纂した蜀の史書を陳寿が編纂して『三国志』というひとつの史書にまとめたものであるといわれている。中国の正史は国と国との攻防に勝ち抜いた国家が編纂する、勝者によって記録された歴史書である。

宋の時代になり裴松之が登場するまで、中国正史は史実を正しく伝えるというよりも、儒教の教えと中華思想が常に根底にある、皇帝の徳を称えるために書かれた、勝者を賛美するための歴史書だった。つまり、時には史実よりも皇帝の徳の高さを表現することに重きが置かれたため、儒教的な捉え方や中華思想が優先され、史実に潤色が加えられることは当然のことと考えられていたのである。

三国鼎立の時代に数々の戦で功成り名を遂げた西晋の重鎮だった張華は、陳寿の『三国志』を班固・司馬遷にも勝ると高く評価し、平陽候相という役に登用した。張華は陳寿をさらに上の役職に推薦したが、張華と対立関係にある荀勖との確執もあり、陳寿は治書侍御史という低い位にとどまったと云われている。陳寿は母の遺言に従わず母の遺骸を故郷に埋葬しなかったことを周囲から「儒教の教えでは不孝にあたる」と貶められ官職を去ることがあった。儒教の教典といわれる『尚書』春秋三伝を学んだ儒教家としての陳寿が世間の批判を浴びたのである。だが陳寿はその後太子中庶子に復職している。

『三国志』に陳寿が編纂した膨大な歴史資料が採用されたのは、65 歳でこの世を去った後の

ことである。現存している『三国志』は陳寿の死後、大勢の官吏が書き写したものといわれ、当時の写本は現存せず、我々が眼にしている魏志倭人伝は陳寿の死後 800 年以上経た 12 世紀の紹興本、紹熙本といわれる写本である。

陳寿の編纂した魏志倭人伝に大きな影響を与えた出来事は大月氏国の魏への朝貢であるといわれている。大月氏国は中央アジアから北インドにかけて栄えた王朝で、初代カニシカ王の孫にあたる波調王（ヴァースデーヴァ王）が 230 年に魏に朝貢し「親魏大月氏王」として冊封されている。大月氏国は地理的には蜀の西方にあり、魏に冊封されることで蜀の背後を脅かす存在となったのである。この大月氏国の朝貢に貢献したといわれているのが曹操の甥にあたる曹真であった。

曹真は大月氏国の朝貢のあった 230 年に蜀の諸葛孔明との戦いに敗れ、武都と陰平の二郡を奪われてしまったが、なぜかこの敗戦の責任を負わされることはなかった。それどころか翌 231 年に曹真は大司馬に出世している。魏の曹操にとって中央アジアの大国、大月氏国からの朝貢の功績は、諸葛孔明に二郡を奪われた責任を払拭するどころか、大司馬に昇格させるほど大きな功績だった。なぜなら蜀の諸葛孔明が自ら軍を率いて北伐を進め、さらにチベット系の氐族や西域の異民族との連携を図ろうとしていたその矢先、見事に孔明の鼻先を抑え込むことができたからである。

陳寿がこの曹真の出世に強い印象を持ったことは間違いない。大月氏国の朝貢の評価の大きさと「親魏大月氏王」の授与が陳寿に強い印象を与えたことは間違いない。その強い印象が 239 年の邪馬台国の女王卑弥呼の朝貢と「親魏倭王」に繋がって行くのである。

魏志倭人伝は「春秋の筆法」で書かれている

辞書を引くと、「春秋の筆法」とは、「（春秋の文章には孔子の歴史批判が示されているとされるところから） 中国の経書『春秋』のような批判的態度。とくに、間接の原因を直接の原因として表現する論理形式」（出典　精選版 日本国語大辞典）とある。これだけでは理解できないので、よく同意語的に用いられる「一字褒貶」を理解すると「春秋の筆法」の意味も理解しやすい。

『春秋は一字を以て褒貶を爲すと雖も、然れども皆数句を須いて以て言を成す』

これは西晋の政治家であり武将であり学者でもあった杜預（222～284 年）の『春秋経伝集解』の序文で、「春秋の筆法」の原理として「一字を以って褒貶を為す」としている。「一文字を錯えることで人を褒めたり貶したりしている」というような意味である。また「春秋は文を錯うるを以って義を見わす」ともあり、「春秋の筆法」では文をわざと矛盾させることで真実の意味を持たせるとも云われている。

『春秋』は、諸侯などの「死」を記録するにも「卒」「崩」「薨」など、字を錯えることで死者の身分の違いや他殺、自然死の違いなどを区別して記録したと解釈されている。一字を錯えることには孔子の歴史批判が隠されているともされ、日付順に淡々と綴られた出来事の中に、文字の錯えや文章の錯えを見つけ出すことで、孔子の隠された批判精神や、暗喩的に表現された歴史の真実を読み解くことができると後の儒教家が理論づけたのである。

陳寿が用いた春秋の筆法とは

陳寿は魏に滅ぼされた蜀の官吏として歴史書の編纂にあたっていたが、司馬炎が魏を簒奪し西晋が誕生すると、西晋の官吏に転職して『三国志』の編纂に携わった。陳寿はまさに魏・蜀・呉三国の興亡を目の当たりにしたという、時代の目撃者としての立場だけではなく、三国の興亡

に直接関わりのあった人々がまだ多く生き残っていた時代の歴史を綴らなければならない歴史家という困難さを抱えることになった。

陳寿は、過去の歴史家『史記』の編者司馬遷（BC145 年～BC87 年？）が『史記』の中で、武帝の父である景帝を批判した（諸説あり）として 4 年間投獄されたことや、『漢書』の編者班固（32～92 年）も宮中の政争に巻き込まれて獄死したことを知っていたはずである。同時代の歴史を記す『三国志』の表現には一字一句最新の注意を払う必要があった。たった一文字の間違いで命を失う可能性もあった陳寿は、まさに命を賭して『三国志』を書き綴ったのである。

前漢時代の公洋学者の董仲舒は『春秋繁露』の中で「春秋は十二世を分かちて以て三等と為す」と述べている。三等とは三つの時代区分のことで、孔子が自ら見聞きした時代を「所見」、孔子が体験者から直接聞いた時代を「所聞」、孔子が間接的に伝え聞いた時代を「所伝聞」として分けたと主張している。「所見」は魯の時代の三世の君主哀公・定公・昭公の六一年間、「所聞」は襄公・成公・文公・宣公の四世八五年間、「所伝聞」は僖公・閔公・荘公・桓公・隠公の五世九六年間としている。

董仲舒は「所見」「所聞」「所伝聞」の表現の違いを「見る所に於ては其の辞を微にし、聞く所に於ては其の禍を痛み、伝え聞く所に於ては其の恩を殺く。情と俱にすればなり」と表現している。つまり孔子が自ら見聞きした時代の「所見」は孔子と同時代であるため露骨な表現を避けて隠微な言い回しをし、孔子が体験者から直接聞いた「所聞」の時代は人の不幸を我が事のように痛んで記述し、孔子が間接的に伝え聞いた「所伝聞」の時代は遥か昔のことなので哀れみの情は省いて記述していると論じたのである。孔子は特に「所見」の時代にあっては時の権力者を露骨に批判してしまうと迫害や処罰を受けることになるので、それを避けるためには保身の知恵を働かせて権力者を直接批判するような行為をしないように自己規制していたとも指摘している。

陳寿は『三国志』を孔子の「初見」の立場で編纂している。むしろ極めて同時代性の強い『三国志』を編纂するためには「春秋の筆法」をどうしても用いなければならなかったのである。

陳寿の用いた「春秋の筆法」が典型的に表れている記述は、『三国志』に登場する王の死に関する記述であることは良く知られている。

『三国志』では、「死」の記述をする場合、儒教でいう「徳」の高さによって四段階に区別して表記している。徳の高い順から「崩」、「薨」、「卒」、「死」である。

魏の皇帝の死を記述する場合、武帝（曹操）、文帝（曹丕）、明帝（曹叡）の場合は

王崩于洛陽（王、洛陽に崩ず）

帝崩于嘉福殿（帝、嘉福殿に崩ず）

帝崩嘉福殿（帝、嘉福殿に崩ず）

と、皇帝の死を「崩」の文字を用いている。

貢献度の高い臣下の死に対しては「薨」を用いている。魏の第四代皇帝、明帝の子の高貴郷公（曹髦）の死は「高貴郷公卒」（高貴郷公卒す）と記述されている。高貴郷公は司馬炎の専横に反旗を翻して兵を上げたが、戦いに敗れて殺されてしまった。本来は先代の皇帝と同じ「崩」の字を用いるべきであるが、現皇帝に反旗を翻したことに配慮し、敢えて「崩」、「薨」、「卒」、「死」の臣下の「薨」下の三番目の「卒」の字を当てたと考えられている。

陳寿が真の天子と崇める劉備の死については『三国志』蜀志の中で、劉備を「先生」と表現し、劉備の死を「先生殂于永安宮」（先生、永安宮に殂す）と表現している。

このように、孔子の「春秋の筆法」を継承していた陳寿は、一字を錯えることにより史実とその背景にある歴史を記し、さらに儒教的な価値判断をも加えていたのである。それは希代の歴史

家であった陳寿が、勝者の論理で定義され潤色された事実が史実とされ後々まで記録される歴史と、その背景に潜む紛れもない真実とを、儒教の教えと現実との狭間の中で葛藤しながらも、その全ての表現を「春秋の筆法」に託したのである。

魏志倭人伝の中には「春秋の筆法」が用いられていることがすぐにわかる部分がある。

『始度一海千餘里至對馬國。・・・略・・・至一大國。・・・略・・・千餘里至末盧國。・・・略・・・到伊都國。・・・略・・・東南至奴國百里』

帯方郡から邪馬台国に至る道程を記述した有名な部分であるが、ここで陳寿が用いている「春秋の筆法」は「至」と「到」の文字が錯えられている部分だ。狗邪韓国から「至対馬国」、「至一支国」、「至末蘆国」、「到伊都国」、「至奴国」、「至不弥国」までの道程記事の記述の中で、唯一伊都国だけが「到伊都国」と表記され、他の国と違う「到」が使用されている。これは魏の使者が帯方郡から邪馬台国に来た目的地の国が伊都国であったことを一文字錯えるだけで表現していると解釈することができるのである。

裴松之が指摘した陳寿の偏向

『三国志』に陳寿の偏向が多く見られることを指摘したのは、後に『三国志』に膨大な「裴注」をつけた裴松之（はいしょうし）である。裴松之は宋の文帝に『三国志』に注をつけることを命じられた。

『三国志』には同時代の歴史を綴るという大きな制約があったこと、しかも儒教的な発想によりバイアスが加わり史実がそのまま記せていない部分があること、さらに内容があまりにも簡潔にすぎるため、史実を客観的に捉えて誤りを正し、不足する記事を補うように命じられたのである。

裴松之は陳寿の編纂した「四夷伝」の不十分さを指摘している。儒教の中核的な思想は「中華思想」と「徳治」である。「中華思想」の中華は世界の中心という意味であり、「徳治」とは中華を支配する皇帝は上天から選ばれた天子が「徳をもって世界を治める」ことを意味し、どちらも他国に対する中国王朝の優位性の上に立脚した思想である。

中華思想では、四方を東夷（とうい）・西戎（せいじゅう）・北狄（ほくてき）・南蕃（なんばん）といわれる夷狄（いてき）に囲まれていると考えるが、たとえどんな野蛮な国であろうとも、天子に徳が備わってさえいれば、夷狄はその徳を慕って必ず朝貢に訪れ王朝に従うという理屈である。ところが『三国志』にはこの四つの夷狄（四夷）の内の西戎が欠けていると裴松之は指摘したのである。

西戎といわれて想い起こすのは大月氏国の朝貢である。裴松之は陳寿が西晋の皇帝司馬炎の祖父司馬懿（い）と因縁のあった大月氏国を敢えて「表」に記述しなかったことを見抜いたのだ。大月氏国の朝貢は曹操の甥の曹真の手柄であり、司馬懿は充分な力がありながら常に曹真の後塵を拝していたため、陳寿は皇帝に配慮し敢えて西戎の記事を省いたというのである。これは皇帝司馬炎に配慮し「敢えて必要な事を記述しない」という「春秋の筆法」によるものでもある。裴松之は『三国志』の「裴注」で西戎の記事をすべて『魏略』の「西戎伝」を引用することで補った。

儒教の理想像で描かれた倭人の習俗

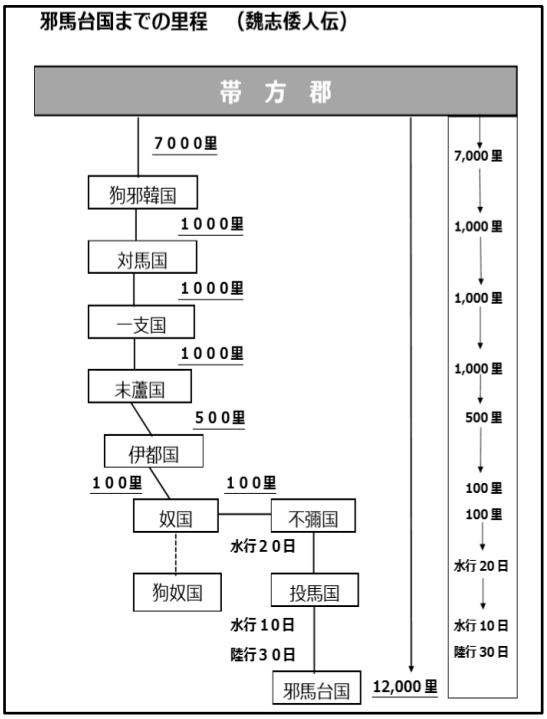
魏氏倭人伝の中に倭人の葬礼に関する記事がある。「人が死んだときは棺に入れ、棺は 10 日あまり家に置き、仮の殯（もがり）(葬儀)をする。殯のときは肉を食べず、喪主は大泣きしているが、他の人たちは集まって酒を飲み、歌を唄ったり踊ったりする。殯が過ぎると棺をそのまま土に埋め、土を盛りあげて高塚を作る。棺を囲う槨（かく）はない。葬儀が終わると家族は水に入って体を洗い清め（禊（みそぎ）す）る。その様は中国における練沐（れんもく）のようである」という部分だ。

陳寿は倭人の葬儀の習俗が中国の儒教の練沐に似ているとすることで、中華の四夷の一つ東夷の倭国にも儒教の教えが浸透していることを強調し、倭人の服喪の習俗を記述することで天子の徳の大きさを褒め称える記述としたのである。「家の中は部屋が分かれていて、父母・兄弟が寝るときは別々の部屋で寝る」という倭人の習俗に関する記事も、儒教の「礼」の教え「長幼・男女の別」に従った習俗であることを意図的に描こうした記事である。

「春秋の筆法」では夷狄を表記するときにも一字を錯える。中華の諸国である「晋」の国の人々には「晋人」のように「人」をつけるが、四夷の姜（きょう）や戎（じゅう）は中華の国の民ではないから「人」が付かず「姜」や「戎」と記述するなどである。「魏志倭人伝」の「倭」は四夷の内の東夷であるが「人」が付いて「倭人」と表記されている。陳寿は倭国をそれだけ特別待遇していることになる。中国史書の中には単に「倭」とのみ記載し「人」をつけないものもある。それはその時代の中国王朝から見た「倭国」の重要性の違いによるものと解釈できるのである。

畿内説と九州説の里程解釈比較

ここからは、多くの歴史研究家を悩ませてきた魏志倭人伝の里程問題を解読してみたい。そのまま記事を読んだだけではすぐに矛盾点にぶつかり思考が混乱してしまうことになる。この里程記事を解く鍵は、陳寿がどのような筆法を用いているかを解読する必要がある。



そして、その鍵は『三国志』とそこに含まれる魏志倭人伝の中に必ず隠されているのである。なぜなら、何十年、何百年か先の世にこの倭人伝を読む者が内容を理解できなければ、史書としての意味を成さないからである。

畿内説の里程解釈

まずこの道程・里程記事で最初に悩まされる部分は、不弥国から邪馬台国に至るまでの、不弥国から投馬(殺馬)国までは南に水行 20 日、邪馬台国までは投馬(殺馬)国から南に水行 10 日、陸行一月（30 日）と読み取れる部分だ。

道程記事を読みながら里数を足して行くと幾つかの矛盾点にぶつかる。邪馬台国までの距離が帯方郡から約 5,200 km（1 里＝434m）というとんでもない遠距離になってしまうのである。これが邪馬台国の比定地論争を生む最大要因になっているのだが、問題は南に水行 20 日で投馬国、南に水行 10 日、陸行一月（30 日）で邪馬台国に「至る」の起点をどこにするかなのである。

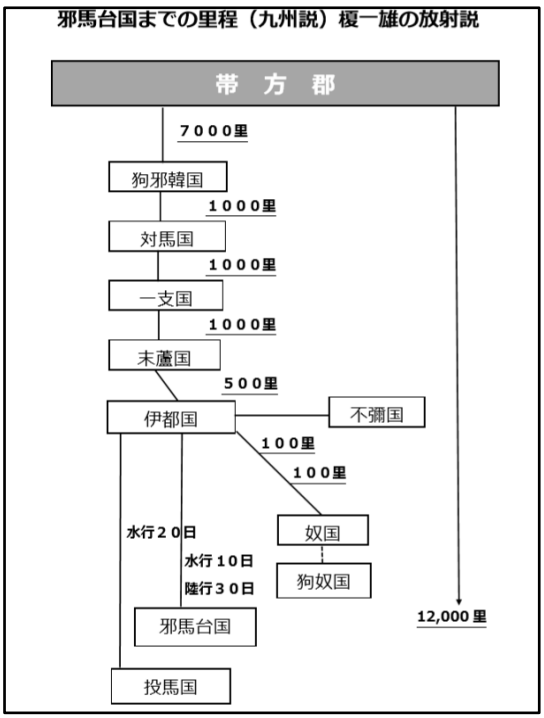
畿内説はこの問題には触れず、道程記事の中の不弥国から「南」を「東」の間違いだと決めつけ、邪馬台国を近畿地方だと主張したのである。

だが、この手法は明らかに禁じ手である。この手法を用いることを認めたなら、方位に限らず、里数や国の名称も間違いだとすることができるため、邪馬台国は何処にでも存在させることができてしまうのである。これは現代の学問では限られた条件下でしか成立しない「部分最適」とされ、真実の証明には至っていないと判断される。これに対し「全体最適」はあらゆる角度で検

討した結果、整合性が得られることを意味し、真実の証明が成されたと判断する。つまり畿内説は限られた条件下で得られた結論でしかないことになる。

邪馬台国九州説の里程解釈　―榎一雄の放射説―

一方の九州説は当時の一里の距離は長里（約 434m）ではなく短里（約 70m）だったとして、邪馬台国をなんとか九州の中に納めようと試み、あるいは伊都国を起点に放射状に奴国や邪馬台国、投馬国を配置することで邪馬台国を九州の中に納めようとした。そして皮肉なことに畿内説、九州説のどちらもその正当性を立証するため、魏志倭人伝の里程・道程記事に登場する地名の比定（推定）に血道をあげることになったのである。



邪馬台国九州説の代表的な道程・里程解釈のひとつは東京大学の東洋史学の名誉教授だった榎一雄（1913～1989 年）の放射説である。榎一雄は東京帝国大学入学後、邪馬台国九州説を唱えていた白鳥庫吉の指導も受けていた。榎一雄は伊都国から先の道程は伊都国を起点として記述されていると解釈し、伊都国からあとに記述されている奴国、不弥国、狗奴国、邪馬台国、投馬国までの道程はすべて伊都国を起点とした距離であるとした。その根拠としたのは魏志倭人伝の道程記事の中に「春秋の筆法」が用いられた部分だ。

狗耶韓国から対馬国に「至」、対馬国から一支国に「至」、一支国から末盧国に「至」、末盧国から伊都国に「到」、伊都国から奴国に「至」・・・のように、伊都国だけが他国の「至」ではなく「到」になっていることで、魏の使者は伊都国が目的地で、伊都国に留まったと解釈したのである。そして伊都国からあとに記述されている、奴国、不弥国、狗奴国、投馬国、邪馬台国は伊都国を拠点として放射状の道程と考えることで、奴国も不弥国も伊都国からは 100 里の距離にあり、邪馬台国は伊都国から水行 10 日、陸行一月（30 日）、投馬国は伊都国から水行 20 日の距離にあるとした。つまり、榎一雄は魏の使者の目的地を「一大率」のあった伊都国と推定し、魏からの使者は伊都国を起点に奴国や不弥国などの距離を本国に報告したと推測したのである。

だが、この放射説にも問題がある。伊都国から邪馬台国までの水行 10 日、陸行 30 日の道程記事だ。放射説では伊都国から奴国への 100 里と奴国から不弥国までの 100 里の合計 200 里が短くなっただけで、相変わらず邪馬台国までの距離は長く、九州の中に納めようとすると南九州かさらに南の海上に持ってこなくてはならなくなるのだ。

道程・里程記事の解釈　女王国は不弥国

まずこの記事の中の一つ目のポイントは、魏志倭人伝では帯方郡から先、国と国との里数を記しているが、最後に、「帯方郡から女王国に至るまでの里数の合計は 12,000 余里である」とわざわざ念を押して表記していることである。

つまり、里数を足して行って合計が 12,000 余里になった国が女王国なのだと強調した表記をしていることに気付く。（なぜ邪馬台国ではなく女王国と表記したのかは後述する）

二つ目のポイントは女王国がどこの国なのかということだ。今まで登場してきた国以外の国を記述した部分がある。

「女王国から以北は・・(中略)・・斯馬国、己百支国、・・(中略)・・支惟国、烏奴国、奴国、此れが女王の境界が尽きる所である」

ここで奴国は二度目の登場である。さらに、奴国は女王の力が及ぶ境界に位置している。この構成を魏志倭人伝の道程と里数表記にしてみると次のようになる。

帯方郡	→	狗邪韓国	7,000 里
狗邪韓国	→	対馬国	1,000 里
対馬国	→	一支国	1,000 里
一支国	→	末盧国	1,000 里
末盧国	→	伊都国	500 里
伊都国	→	奴国	100 里
ここまでの合計			10,600 里

12,000 里―10,600 里＝1,400 里（ここでは不弥国までの 100 里は意図的に除いている）

このままでは 12,000 里には 1,400 里足りない。だが、ここで忘れているのは対馬国の「広さは 400 里四方あまり」と一支国の「300 里四方の広さ」という部分である。原文では「方可四百里」「方可三百里」と記述されている。

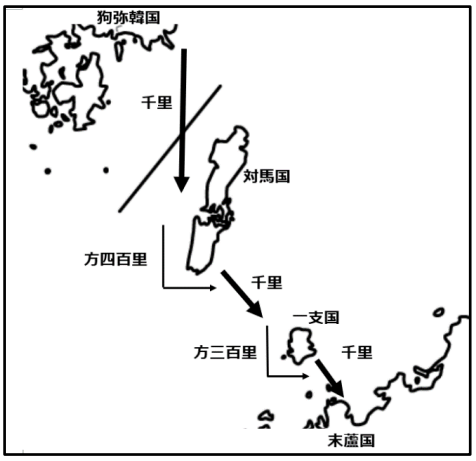
この時代の船は海岸線に添って航海していた。つまり、対馬国の 400 里四方という意味は島の大きさを表しているだけではなく、船が島を通過して行くには海岸線に沿っていったん東に（又は西）に行き、島の先端部分から方向を南に変えて大海に出て次の目的地に向かう航路を辿る必要があった。その移動距離は島の大きさを表す東西の距離と南北の距離の二辺に相当する。つまり、狗邪韓国から対馬国までの距離は 1 ,000 里だが、そこに島の大きさ、東西 400 里、南北 400 里の二辺の合計 800 里を加算しなければならないのである。同様に一支国は 300 里四方であるから、一支国を通過するための東西 300 里、南北 300 里の合計 600 里を加算しなければならない。

800 里 ＋ 600 里 ＝ 1,400 里

10,600 里 ＋ 1,400 里 ＝ 12,000 里

あらためて帯方郡から順に対馬国と一支国の島を通過する距離を足して行くと、帯方郡から丁度 12,000 里に位置する国は奴国ということになる。

帯方郡	→	狗邪韓国	7,000 里
狗邪韓国	→	対馬国	1,000 里
対馬国		400 里＋400 里＝800 里	
対馬国	→	一支国	1,000 里
一支国		300 里＋300 里＝600 里	
一支国	→	末盧国	1,000 里
末盧国（まつら）	→	伊都国	500 里
伊都国	→	奴国	100 里
合　計			12,000 里



奴国の東 100 里には不弥国がある。そして、奴国か

ら不弥国までの 100 里を加えると 12,100 里になり、奴国から不弥国までの 100 里は 12,000 余里の「余」にあたる距離と解釈できる。道程・里程記事は「帯方郡から女王国に至るまでの里数は 12,000 余里である」としている。

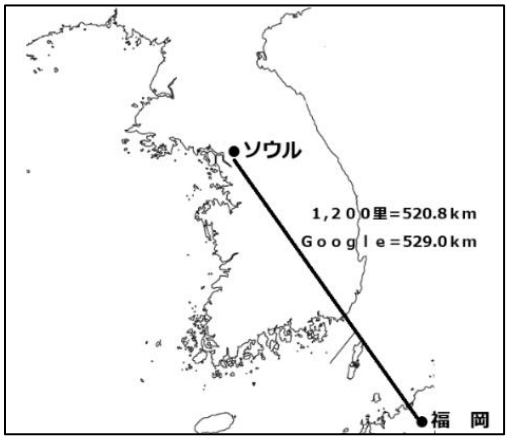
12,000 里ちょうどの距離の奴国の「余」に該当する東 100 里に不弥国がある。女王国、つまり卑弥呼のいる国は不弥国なのである。

誇大な里数表記

帯方郡から女王国に至るまでの里数は 12,000 里余りである。km に換算すると、

12,000 里 × 434m ＝ 5,208,000m ＝ 5,208 ㎞

になる。日本列島の長さは東西・南北にそれぞれ約 3,000 ㎞であるから、この距離は日本列島の長さの約 1.7 倍ということになる。これでは邪馬台国がはるか南の海上に存在することになってしまう。この距離表記こそ多くの歴史研究家を悩ませてきた最大要因である。結果として、辻褄合わせに南を東の誤記であると方向そのものを変えてしまうか、当時の倭人は周の短里を使っていたので一里は約 70m で計算しなければならなくなり、挙句の果てには、陳寿は日本列島を東西に長い島でなく南北に長い島と認識していたという証拠を 15 世紀の明の時代の古地図「混一疆理歴代国都之図（こんいつきょうりれきだいこくとのず）」を持ち出し、その地図の日本列島が九州を起点に日本列島を 90 度南の方向に回転させていることを根拠として、古代中国の地理認識はこの古地図が証明している、と何の躊躇もなく日本列島を 90 度地図上で動かしてしまうはめになる。



仮に、不弥国から投馬国の方向が南ではなく東の誤記であったとすれば、後の裴松之の注で間違いが指摘されていたはずであり、さらに『三国志』は中国正史として陳寿が編纂したものであるから、たとえこの時代の倭国が短里を用いていたとしても、中国正史として編纂された『三国志』の中で、倭国伝だけを短里で距離を表記しなければならなかったという必然性を見出すことはできない。

『邪馬台国の全解決』の筆者、孫栄健氏は著書の中で、「露布（ろふ）の原理」で距離を 10 倍にしているのではないかという指摘をされている。露布の原理とは、第二次世界大戦中の大本営発表のように、国威発揚のため戦果を 10 倍して発表することと同様のことだそうである。

そこで、ものは試しで実際の距離はどのくらいなのか調べてみることにした。最近はインターネットのおかげで大変便利になり、Google-Maps で直線距離が簡単に測れるようになった。

韓国のソウルと福岡市との直線距離は約 529 ㎞である。帯方郡と奴国との距離は 12,000 里、それを 10 分の 1 にすると 1,200 里で 520.8 ㎞である。Google-Maps で測った韓国のソウルと福岡市との直線距離の約 529 ㎞と 12,000 里の 10 分の 1 の 1,200 里、520.8 ㎞と比較すると誤差はたったの 1.5%なのである。（以下、km 距離換算は Google-Maps による計測値）

これは単なる偶然なのだろうか。陳寿は魏志倭人伝の中の距離表記を 10 倍にして記述していると確信が持てるほどの近似値である。

では、陳寿は単純に露布の原理だけで距離を 10 倍にしたのだろうか。戦果を 10 倍するだけなら露布の原理で良いのかもしれないが、夷狄の国の里程である。そこには露布の原理とは違う

原理が働いている可能性はないのだろうか。つまりそこには、陳寿が用いた「春秋の筆法」といえる原理が働いているのではないか、という疑問が湧いてくるのである。

帯方郡の南 12,000 里の意味するもの

陳寿にとって東夷の倭国は「会稽(かいけい)は東冶(とうや)の東」になければならなかった。しかもその位置は狗弥韓国の南 5,000 里に位置していなければならない。つまり、帯方郡から邪馬台国までの距離は 12,000 里、帯方郡から狗邪韓国までが 7,000 里であるから、狗邪韓国の南へ差し引き 5,000 里＝約 2,170 ㎞に邪馬台国が位置していなければならなかったのである。

韓国の釜山から沖縄の那覇までの直線距離は約 986 ㎞＝約 2,270 里。ソウルと台湾の直線距離は約 1,339 ㎞＝約 3,085 里で 5,000 里には全く足りない。ちなみに釜山とフィリピンのマニラまでが直線距離で約 2,429 ㎞＝約 5,596 里であるから、狗邪韓国から南に 5,000 里はルソン島辺りになる。

この現実とあまりにも乖離した距離表記の理由は、朝貢に訪れる国が遠方であればあるほど皇帝の徳が高いことを意味する中華思想に加え、司馬懿の功績を讃えるためでもあり、さらに歳時をもって魏に朝貢する東夷の邪馬台国を呉の東に位置させることは魏にとって地理的・軍事的に優位になること。そして倭人の鯨面文身という習俗が南洋系民族を想起させたこともひとつの理由だったのだろう。

魏志倭人伝に登場する倭人の習俗は明らかに南洋系の海人(あま)族である。入れ墨の習慣、海に潜水して魚や貝を捕る漁はまさに海人族を彷彿とさせる。また中国にやって来る使者が皆な呉の太伯の後裔であるとばかりに自らを「大夫(たいふ)」と名乗り、髪型や入れ墨についてもその由来を「夏王朝の六代目王の少康の子が会稽に封ぜられると」としているところなどは、倭人の間では、祖先が中国でも伝説とされる夏王朝から呉の会稽に移り住んだという伝承が今でも語り継がれているかのように記述されている。

「大夫」は中国の周王朝の時代（BC1046 年～BC256 年）の官爵名で、領地を持った貴族のことである。大夫は「卿」の次に位置する位で、周代、周王室および諸侯に仕える小領主が大夫と呼ばれていた。倭国の場合の大夫は有力豪族と表現した方がわかりやすいかもしれない。

夏王朝は BC2000 年頃、現在の中国山西省南部と河南省西部辺りにあったと云われる伝説の中国最古の王朝である。夏王朝は中国二十四史の司馬遷の『史記』にその記事があり、陳寿は当然その存在を知っていたはずだが、一方の倭人が夏王朝六代目の王少康の子についての逸話まで伝承していたというのはどうも疑わしい。むしろ「大夫」という官爵が周王朝の官制によるもので、周が統治していた地域が三国時代の呉と重なるため、陳寿は敢えて倭人の習俗と「夏の少康の子が会稽に封ぜられるとき」とを結びつけ、倭人が会稽の東冶辺りに祖先を持つ人々であると強調したのではないか。これも儒家としての陳寿の発想によるものなのだろう。

陳寿が倭人伝の資料として用いたといわれる『魏略』には「倭の地は概ね会稽の東にあるだろう。儋耳(たんじ)郡・珠崖(しゅがい)郡（海南島）と互いに近い」としているのに対し、陳寿は敢えて倭人伝では「まさに会稽の東冶の東に在るべし」と記述したとされている。また「夏の少康の子が会稽に封ぜられるとき」は『漢書』地理志からの出典であり、「夏の少康の庶子は、会稽に封建されると髪を切り体に入れ墨をして龍の子に似せ、それにより蛟竜の害を避けた」という部分と、倭人の鯨面文身の習俗とを意図的に結び付けたものであろう。帯方郡から東夷の倭国までの距離を 12,000 余里とした理由はやはり司馬懿の功績をより大きく見せるための極めて儒教的な意図が働いたと考えるべきである。

水行 10 日、陸行 1 月(30 日)の解釈

『水行 10 日、陸行 1 月』はどの国を起点にしているのか。

魏志倭人伝の里数表記は末蘆国、伊都国などの直前の国が起点になっているが、それまで里数で距離を表記していたものが、不弥国の後は一転して水行、陸行の日数表記に変化している。里数表記から一転して水行、陸行の日数表記に変化した。つまりそれまでの表記と錯えた表記方法を取っているということは、「春秋の筆法」に従えば「背後に隠れた意味がある」ことに注意を払わなければならないという警告を意味する。つまり、この部分では「水行、陸行の起点となる国は、直前に表記されている不弥国ではないのでご注意ください」と陳寿が警笛を鳴らしていることに気付かなければならないのである。では、その起点は榎一雄が放射説で唱えた伊都国なのだろうか。だが、伊都国を起点にしたとしても邪馬台国はやはり南方はるか彼方になってしまうことに違いはない。

里数表記ではなく、ここで突然日数表記になったのは、起点となるのはそれまで里数表記で登場したどの国でもなく出発点に戻り、改めて距離表記を日数で換算しなければならないことを示している。邪馬台国までの道程の出発点はもちろん帯方郡である。つまり水行、陸行記事の主語＝起点は「帯方郡」なのである。

さらに、『水行 10 日、陸行 1 月』は帯方郡を起点とした女王国までの距離を示していることから、水行 10 日と陸行 1 月＝30 日で進む距離がそれまでに示された里数の合計 12,000 余里に合致するという計算式にもなっているのである。

陸行一日は 40 里　その鍵は『三国志』明帝記にある

『三国志』明帝記第三、干宝の「晋記」注に、司馬懿が遼東半島の公孫淵討伐に向かう際、太祖曹操の孫にあたる明帝（曹叡）が、どれくらいの日数があれば遼東を平定できるかと司馬懿に尋ねた記事がある。司馬懿は「往きに百日、攻撃に百日、戻りに百日、六十日間を休息にあてます。このようにすれば一年で十分です」と答えている。

明帝は司馬懿を公孫淵討伐に向わせる際、4 万人の軍勢をつけようとした。だが臣下の者たちは 4 万人の軍勢は多すぎて戦費が賄えないと反論した。対して明帝は「四千里の彼方に征伐におもむくのだから、たとえ奇策を用うるとはいっても、やはり軍事力に頼るべきであり、戦費を安くあげようと計ってはならない」といって 4 万人の軍勢を出発させた。

この会話から、魏の首都洛陽から公孫淵のいる遼東までは 4,000 里の距離があり、陸行(徒歩)では 100 日かかる距離と認識されていたことがわかる。一日の陸行の距離を算出すると、

4,000 里 ÷ 100 日 ＝ 40 里 × 434m ＝ 17.36 ㎞

つまり、陳寿は陸行 1 日に進む距離は 40 里＝17.36 ㎞だと理解していたことになる。この 40 里という距離は、魏志倭人伝の陸行 1 日 400 里の 10 分の 1 になる。

ちなみに実際の距離を測ると、洛陽を現在の中国の江南市洛陽とし、公孫淵は遼東の襄平県で司馬懿に敗れ最期を遂げたとの記事により、その地を襄平県、今の中国遼寧省遼陽市と仮定するとその直線距離は約 1,195 ㎞になる。里数に換算すると、

1,195 ㎞ × 1,000 ÷ 434m ＝ 2,753 里

となる。直線距離のため 4,000 里とは 30%強の誤差があるが、『魏名臣奏』（魏の臣の上奏をまとめたもの）にある散騎常侍何曾の上奏文に「司馬懿はご命令を奉じて賊徒を誅滅せんとしておりますが、歩兵・騎兵数万の行く手の道は曲がりくねって険しく、四千里以上の道程でありま

す」とあり、実際の道程は 4,000 里以上であったことを裏付けている。

ここで改めて『水行 10 日、陸行 1 月』が何を意味するかを考えてみる。

帯方郡から女王国までの距離は 12,000 里余りである。だが、陳寿は陸行 1 日に進める距離は 40 里と知っていた。

［一日の陸行距離］

12,000 里 ÷10＝1,200 里

1,200 里÷ 陸行 30 日 ＝ 40 里 ・・・陸行 1 日に進める距離

40 里 × 434m ＝ 17,360m ＝ 17.36 ㎞

一日の陸行（徒歩）が 400 里＝173.6km は現実的な数字ではない。よって 12,000 里の 10 分の 1＝1,200 里が陳寿の知っていた陸行 30 日に相当する距離となる。

ここで問題になるのが『水行 10 日、陸行 1 月』という表現である。

『帯方郡から女王国に至るまでの里数』＝『12,000 里余り』＝『水行 10 日、陸行 1 月』

式で書くとこのようになるが、実際の距離換算にすると陸行 1 月だけでほぼ計算式が成り立ってしまい、水行 10 日は余りの部分か 0 になってしまう。

その理由はこの文が陸行 1 日の距離と水行 1 日の距離、水行 10 日＝陸行 1 月（30 日）の比率を示した部分だからである。

［一日の水行距離］

水行 10 日＝陸行 30 日＝ 10 : 30 ＝ 1 : 3

陸行 1 日＝40 里

水行 1 日＝40 里×3＝120 里＝17.36km×3＝52,08 ㎞

一日の水行距離が 1,200 里＝520.8 ㎞はこの時代ではありえない数字だ。24 時間手漕ぎの船を漕ぎ続けたとしても時速 21.7 ㎞で漕ぎ続けなければならないことになる。半日であれば時速 43.4 ㎞にもなる。現代のエンジン付きの船であれば可能だが、古代の手漕ぎに小さな帆のついた船ではとてもこの速度と距離は不可能だ。

陳寿は陸行 1 日、水行 1 日に進める距離の基準を明確に持っていた。そして、この陸行・水行の基準は軍事に関わりを持つ者の間では常識として知られていたのではないだろうか。

道程記事の中で文を錯えたことが意味するもの

ここで魏志倭人伝の里数表記と道程記事を改めて見てみよう。記事は分析しやすいように分割している。

① 倭は帯方郡の東南の大海の中にある。帯方郡から倭に行くには海岸に沿って船で進み、韓国を通過して南や東に向かったりしながら倭の北岸の狗邪韓国に到着する。そこまで七千余里である。

② 初めて海を渡り、距離千里余りで対馬国に着く。

③ また南に 1,000 里余り行くと、瀚海（かんかい）という海があり、一支国（壱岐）に着く。

④ 南に 1,000 里余り行くと末盧国に着く。東南に向かって陸路で 500 里行くと伊都国に着く。

⑤ 東南に向かって 100 里行くと奴国に着く。東に行くと不弥国に 100 里で着く。

⑥ 南に向かって水上を行けば 20 日で投馬国（殺馬（さつま）国）に着く。

⑦ 南に向かうと邪馬台国に着く。女王が都を置く国である。水行（船）10 日、陸路（徒歩）で一月（30 日）かかる。

⑧　女王国より北は、おおよその戸数や距離を記すことができるが、その他の国ははるか遠く詳細はわからない。
⑨　次に斯馬国あり。次に己百支国あり・・・・・・次に奴国あり。
⑩　これ（奴国）は女王の境界が尽きるところである。
⑪　その南（女王の国の南）に狗奴（球磨）国があり男子を王としている。その官を狗古智卑狗といい、女王には属していない。
⑫　女王国までは 12,000 里余りである。

しつこいようだが、この道程記事をそのまま読んで里数を加算していくと、邪馬台国ははるか南の海の彼方に存在することになる。だが、それは陳寿が仕組んだ筆法にまんまと嵌ってしまった結果なのである。

この記事は三つの段落に分けて考えなければならない。

一、① ～ ⑤の距離を里数で表記している部分
二、⑥ ～ ⑦の距離を日数で表記している部分
三、⑧ ～ ⑫のその他の国名など

一つ目の段落は帯方郡から不弥国までの道程とその里数記事である。不弥国は帯方郡から連続して里数表記されている最後の国である。

二つ目の段落は道程を水行と陸行の日数で表記した記事である。

三つ目の段落は不弥国まで表記した国以外の邪馬台国の国々を表記し、締めくくりは帯方郡から女王国までの 12,000 里余りという総距離の部分である。

陳寿は道程記事を並び替えていた

陳寿はここでも「春秋の筆法」を使っている。「文を錯えた」のである。それまでは国と国との距離を里数で表記していたものが、不弥国の次はいきなり日数表記に変わっている。そして⑧は不弥国までの道程と女王国についての記述で⑨には不弥国から先の女王卑弥呼の力の及ぶ範囲の国々が並んでいる。⑤、⑧、⑨は直前に記述されている国を起点としているという点で捉えると、もともと連続した文であったことが推測できる。⑨の冒頭にある「次に斯馬国あり」の起点になる国は直前に記述されている不弥国であり、最後の奴国まで隣接した国々の紹介記事という大きな段落にまとめることが出来る。

⑥と⑦の段落はもともと別の段落にあった文なのではないか。それは⑫の前にあったのではないか。並び替えてみるとこのようになる。

⑩　これ（奴国）は女王の境界が尽きるところである。
⑪　その南（女王の国の南）に狗奴（球磨）国があり男子を王としている。その官を狗古智卑狗といい、女王には属していない。
⑥　南に向かって水上を行けば 20 日で投馬国（殺馬国）に着く。
⑦　南に向かうと邪馬台国に着く。女王が都を置く国である。水行（船）10 日、陸路（徒歩）で一月（30 日）かかる。
⑫　女王国までは 12,000 里余りである。

⑩の「奴国が女王の境界が尽きるところ」のあと⑪に奴国の隣国、狗奴国の記事がある。帯方郡からスタートし、狗弥韓国、対馬国、一支国、末蘆国、伊都国、奴国、不弥国、その他の国々、そして奴国の隣国の狗奴国まで、隣り合った国が連続した表記で繋がったことがお分かりいただけると思う。つまり「倭は帯方郡の東南の大海の中にある。帯方郡から倭に行くには・・・」

から始まった文が⑪で終着地に到達したことになる。

すると、並び替えた場合⑥と⑦の「南に」の起点はどこになるのだろうか。そして⑫の「女王国まで」の起点である。これも起点は「帯方郡から」だ。⑪で文頭から始まった連続した国々の記事が完了しているため、⑥の「南に向かって水上を行けば 20 日で投馬国（殺馬国）に着く」の記事では再び起点が帯方郡に戻ることになる。⑦と⑫はセットになっている文である。⑥と⑦を並び替えたあとの道程と里程記事全体はこのようになる。

⑤　東南に向かって 100 里行くと奴国に着く。東に行くと不弥国に 100 里で着く。

⑧　女王国より北は、おおよその戸数や距離を記すことができるが、その他の国ははるか遠く、詳細はわからない。

⑨　（不弥国の）次に斯馬国あり。次に己百支国あり・・・・・・次に奴国あり。

⑩　これ（奴国）は女王の境界が尽きるところである。

⑪　その南（奴国の南）に狗奴（球磨）国があり男子を王としている。その官を狗古智卑狗といい、女王には属していない。

⑥　（帯方郡から）南に向かって水上を行けば 20 日で投馬国（殺馬国）に着く。

⑦　（帯方郡から）南に向かうと邪馬台国に着く。女王が都を置く国である。船で 10 日、陸路（徒歩）で一月（30 日）かかる。

⑬　（帯方郡から）女王国までは 12,000 里余りである。

帯方郡から奴国までの道程記事と里数表記の部分をまとめ、日数表記の部分を帯方郡から女王国までの総距離をまとめたことで、この道程記事が理解しやすくなったことは一目瞭然である。だが、並び替える前の原文が入手できればすぐに「文を錯えた」部分に気付くはずだが、この道程記事はそのほとんどが現存していない『魏略』が元になっているため、残念ながら並び替えは推論でしかない。つまり、魏志倭人伝の道程記事の中で「文を錯えた」部分に気付き、その意図や意味を解明するしか方法はないのである。『魏略』が現存していた時代はすぐに気付けた部分であっても、『魏略』の一部を逸文でしか接することのできない現代の我々にとって、陳寿の記述した原文のままで⑥と⑦の「南に」の起点が不弥国でも伊都国でなく帯方郡であると気付くことは至難の業かもしれない。

ただ、陳寿はこの段落を並び替えることで、邪馬台国を不弥国までの道程から一気に「会稽は東冶の東」にまで飛ばそうと仕組んだことは確かである。その証拠に、数々の歴史研究家たちは陳寿が仕込んだこの罠に悉（ことごと）く嵌ってしまっている。

陳寿の頭の中に描かれた邪馬台国は「帯方郡の南一万二千里余り」に確かに存在していたのだ。そして「文を錯える」という「春秋の筆法」により、道程記事を読む者のほとんど全てを自分の描く「会稽は東冶の東にある邪馬台国」に連れて行くことに成功している。

再び道程記事にもどろう。道程記事の⑨と⑩の記述に注目したい。奴国は女王卑弥呼の権力が及ぶ最も南に位置する国であり、その南は敵国の狗奴（球磨）国である。

次に⑦と⑫を比べてみる。

⑦　南に向かうと邪馬台国に着く。女王が都を置く国である。水行（船）10 日、陸路（徒歩）で一月（30 日）かかる。

⑫　女王国までは 12,000 里余りである。

⑦も⑫も帯方郡から邪馬台国までの距離を表している。⑦は日数で、⑫は里数で表記している。里数は 10 倍されているので帯方郡から女王国までの 12,000 里余りは、実際はその 10 分の 1 になる。先述したように陳寿は陸行一日＝40 里と認識していたからである。

実際の距離換算で検討すると、まず帯方郡から狗邪韓国までの距離は魏志倭人伝では 7,000 里と表記されている。帯方郡（韓国のソウルに仮定）から狗邪韓国（朝鮮半島南端の釜山に仮定）の距離は約 322 ㎞ある。7,000 里の 10 分の 1 は 700 里であるから

700 里 × 434m ＝ 303.8 ㎞

帯方郡と狗邪韓国の実際の距離換算＝約 322 ㎞と比べても近似値である。

次に、狗邪韓国と対馬国、対馬国と一支国、一支国と末蘆国は 1,000 里余と表記されている。

1,000 里 ÷ 10 ＝ 100 里

100 里 × 434m ＝ 43.4 ㎞

である。実際の距離換算（始点と終点の位置で誤差が生じる）では、

釜山と対馬の間の距離　約 59 ㎞

対馬と壱岐の間の距離　約 49.6 ㎞

壱岐と松浦の間の距離　約 39.7 ㎞

と比較しても、ほぼ近似値といってもよい。また、水行 1 日は 52.08 ㎞なので、狗邪韓国と対馬国、対馬国と一支国、一支国と末蘆国の間はほぼ 1 日で渡れる距離だということがわかる。ただ、水行については潮流や風向き、風の強さなど、天候の違いによって 1 日に進める距離に大きな違いが生じるため、倭人伝の中では水行 1 日（120 里）程度で到達可能な距離は一律に 1,000 里(実際には 100 里)と表記されていると理解しなければならない。道程表記も同様に距離表記が全て 100 の倍数になっていることから推察すると、陸行 1 日 40 里もまた正確な実距離ではなく、半日・1 日・数日単位という大雑把な距離感覚で捉える必要があるだろう。

短里説の矛盾点

ここで検証しておかなければならない問題は、邪馬台国九州説論の中の「この時代の倭人は周の時代の短里を用いていた」という説についてである。

難升米は自らを大夫と名乗っていた。大夫は周の時代の官位である。そこで当時の倭人は距離を表すとき、周の時代の短里を用いていたのではないかと推察したのがこの短里説である。

周の時代の一里は諸説あり、短里を約 67.5m、72.5m とする説などがある。だが、どの短里説にも共通していることは、陳寿の編纂した『三国志』の中で、倭人伝以外でこの短里が使用されている例がひとつも示されていないことである。つまり、短里説を実証するものが皆無なのだ。これでは部分最適でしかない。邪馬台国畿内説を唱える研究者が南を東に読み替えることと何ら変わらないのである。

『隋書』東夷伝倭国条に「夷人不知里数但計以日」「夷人は里数を知らざれば、但計るに日を以てす」とあり、倭人は里数を知らず、ただ日数をもって距離を計るとあるが、倭人が全員里数を知らなかったわけではなく、朝鮮半島や中国と往来していた一部の倭人の中には里数を知る者がいたとしても不思議はない。ただ、その里数は朝鮮半島や中国では日常的に用いられていたとしても、倭人の日常生活では距離は日数で計れば事足り、正確な距離の単位を用いる必要がなかったとも考えられる。

だが一番問題になるのは、魏が短里を用いていたと仮定すると、先の明帝記の明帝と司馬懿の公孫淵討伐に関する会話が成り立たなくなってしまうことである。短里説を実際の数字に置き換えてみると、

4 ,000 里 × 72.5m ＝ 290,000m ＝ 290 ㎞

290 ㎞ ÷ 100 日 ＝ 2.9 ㎞

つまり、司馬懿は軍が陸行一日に進める距離はわずか 3 ㎞足らずと云っていることになり、これを聞いた明帝はきっと怒りだしたに違いない。さらに、一里の実距離を『三国志』全体で統一しなければ整合性が保てないし、倭人伝のみ短里を用いたというのでは後の世で混乱を招くだけである。陳寿はあくまで一里＝434ｍで距離表記を用いていたのである。

【参考文献】

『倭国伝』　講談社学術文庫　藤堂明保・竹田晃・影山輝國
『正史三国志１・４（魏書Ⅰ・Ⅳ)』ちくま学芸文庫
『中国通史』講談社学術文庫　堀敏一
『古代朝鮮』講談社学術文庫　井上秀雄
『漢帝国　４００年の興亡』中公新書　渡邉義浩
『魏志倭人伝の謎を解く』中公新書　渡邉義浩
『現代語訳魏志倭人伝』新人物文庫　松尾光
『魏志倭人伝・後漢書倭伝・宋書倭国伝・隋書倭国伝』岩波文庫　石原道博編訳
『邪馬台国の全解決　中国「正史」がすべてを解いていた』言視舎　孫栄健
『草書体で解く邪馬台国の謎　書道家が読む魏志倭人伝』　梓書院　井上悦文
『儒教』講談社学術文庫　浅野祐一
『日本古代史を科学する』PHP 新書
『卑弥呼以前の倭国五〇〇年』ＰＨＰ新書　大平裕
『ここまでわかった！卑弥呼の正体』新人物文庫「歴史読本」編集部編
『三国史記倭人伝』岩波文庫　佐伯有清編訳
『古代日中関係史』中公新書　河上麻由子
『日本書紀（二)』岩波文庫
『日本書紀（上）全現代語訳』　講談社学術文庫　宇治谷孟
『古代史講義』ちくま新書　佐藤信編
『考古学講義』ちくま新書　北條芳隆編
『海の向こうから見た倭国』　講談社現代新書　高田貫太